



国 境

法学部には国際インターンシップという授業科目があり、学生は夏休み中に国内外の国連機関、NGOなどでインターンを行う。この夏、タイ・カンボジア国境で地雷除去をしているNGOに学生を引率した。地雷除去の現場に立ち、NGOスタッフと交流するという、充実した楽しい3日間を過ごした。

この旅のなかで、国境とは何かということを考えさせられた。NGOの活動拠点は崖の上であり、そこからカンボジアの広大な森が見わたせた。カンボジア内戦時、戦禍を逃れてタイ領に逃げ込もうとカンボジア人がこの崖を登ってきたが、当時のタイ軍は彼らを下に蹴落とし、多くの人命が失われたそうだ。NGOのキャンプを後にし、タイ・ラオス国境を悠々と流れるメコン川を小船で周航した。ラオス側に小さな集落があり、ここは自由市場として、両国沿岸の人々がつい先日まで制限なく

行き来していた。しかし、おそらく麻薬などの密輸が発覚したのだろう、今はビザが必要となり、1ヶ月待たないとラオス領には入れないと言われ、ラオスに上陸するという私たちの当初の計画は挫折した。

国境を挟んで、あるいは国境をめぐるって戦争をし、人々を殺傷するのも、戦後復興のために懸命に地雷を除去するのも、さらに国境を越えて自由に往来するのも同じ人間だ。何世紀にもわたって人間は同じ行為を繰り返してきた。「戦争は人の心のなかに生まれるから、人の心のなかに平和のとりでを築かなければならない」という言葉がUNESCO憲章の前文にある。主観的な内心の憎悪だけでなく、それを育む政治的・経済的・社会的な背景も無視できないだろう。国境がなくなり、同時に支配・従属ではなく人々の多様な価値が尊重される。そのような日が近い将来、実現するとは思えない。

国境が人々を断絶・対立させると同時に、国境があるからこそ人々の日々の生活が守られる。そのような国境の両義的な役割を、学生たちと共に崖からカンボジアの森を遠く眺めながら考えていたことを、今、思い出している。

広報委員 西海真樹（法学部教授）

編集室

《八月十三日の夕方……特攻隊出撃の指令を受けとり……ここにもからだにも死装束をまとったが、発進の合図がいつころかからぬまま足ぶみをしてきたから、近づいて来た死は、はたとその歩みを止めた》《出版は遂に訪れず》

《必然の死》が遂に訪れなかった深い傷痕、終戦によってふいに「生」に引き戻された虚無感が、第一次戦後派の作家、島尾敏雄の作品を覆っています。《出口のない海》——06年夏》のインタビュはどんな印象を残すでしょうか。

「選ばれてあることの恍惚と不安と二つ我にあり」というベルレーヌの詩を思い浮かべました。中央大学法科大学院の新司法試験合格者の祝賀会です。会場の雰囲気も、匂いも新鮮でした。出身大学が異なる、さまざまな個性が会って生まれた「新しい風」を感じました。この胎動の芽を多摩キャンパスにおいてもと期待しながら。

ロースクールに中大流の《質実剛健》は似合わないでしょう。同様に、大学でも女子学生が全体の3割を超える「今」も昔も《質実剛健》のオウム返しでいいのかどうか。新しい酒は新しい皮袋に——そんなことも思いました。（広報課 田中紘太郎）

Hakumon

ちゅうおう

2006

冬季号

2006年(平成18年)12月1日発行 No.199

発行 中央大学広報委員会

〒192-0393
東京都八王子市東中野742-1

〈編集担当〉

広報課 ☎042-674-2146

印刷 泰成印刷株式会社
〒130-0026
東京都墨田区両国3-1-12
☎03-3631-8141